

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 305

オウム信者との融和をどのようにして積み重ねていくのか・映画『A2』

オウムに対してどのような嫌悪感を抱き、危機意識を募らせようとも、オウムに入信する若者たちは、我々の社会が育てあげた子供たちであることをけっして忘れてはならない。彼らが社会の中で生きることが息苦しくなってオウムに駆け込んだとすれば、我々の社会は生きることの息苦しさをやはり抱え込んでいるのである。もちろん、息苦しくなって駆け込む場所は無数にあり、オウムはそのうちの一つにすぎないし、また社会の中で生きることの息苦しさはいつの時代にもあり、今の時代に限らないから、その息苦しさを乗り越えることによって人は成長していくとか、大人になっていくと説教したところで、駆け込む場所が見つかるなら、大半の人はそうするに決まっている。呼吸困難ほどの息苦しさに襲われる中で、自殺するしかないほどに追い詰められていくとき、オウムであれ何であれ、駆け込むことで生きのびられるのであれば、それに越したことはない。

社会の中で生きられなくなったら自殺に至るのではなく、社会の外へ突き抜けることで生きていくことができるのであれば、そうする以外にないし、またそうすればよいのである。ところが、オウムにとっての最大の問題は、信者たちが尊師の命令でサリンを撒くなどの犯罪をおかすグループとしての側面を持っていることだ。彼らは自分たちがかつて所属していた社会への敵意から犯罪をおかすのではなく、オウムの教義に従った結果、社会の中からみて犯罪をおかすことになってしまうだけのことで、当然ながら、教義に立てば犯罪行為でも何でもなく、むしろ慈悲に等しい行為であるかもしれない。社会の中で生きる大勢の者たちからすれば、オウムによる慈悲など結構だから、もう二度とサリンなどを撒くようなことをせずに、おとなしく教団の中で修行に励んでいればいいと思っているのだが、社会のこちら側からみて殺人を肯定するような教義を信者たちが捨てる気がないとすれば、つまり信者をやめる気など毛頭ないとすれば、そのような信者たちがあちこちに住み着くことが問題を惹き起こさない筈がなかった。

ここで『A2』の中で、松本サリン事件の被害者である河野義行宅にオウム幹部が謝罪文を手渡しに行ったシーンが改めて想い起こされる。藤井誠二の『アエラ』(02・4・22)所収の記述は、《オウムの出家信者らの日常を記録することで、誰もが報告し得なかった彼らの、いま自分たちがどのような状況に晒されているかを自覚できていないような、無垢だが幼稚な精神性が切り取られ、そこに一連の大量殺人事件の萌芽》が見て取れるその一つとして、その謝罪シーンを取り上げる。《オウムの謝罪文がまる

で謝罪になっていないことに河野が不快感をあらわにしたことにより、謝罪文をどう書き直せばいいのかわからず子供のようにおたおたするオウム幹部たち、そこにアドバイスをする知識人、「その部分は使えないから」といったんカメラを止めるテレビクルーらの一挙一動》までを撮影する森監督の、「河野さんはセレモニーとして割り切って受け入れているのに、オウムはあの程度の認識しか持ち合わせていない、お粗末な人たちなんだということを伝えたかった。でもそれは凶暴さとは違う。(以下略)」という発言もそこには記されている。

藤井誠二や森監督に限らず、その謝罪シーンにほとんどの者が「無垢だが幼稚な精神性」や「お粗末さ」を感じ取ってしまうように、私も同様にそうしたのだが、いまちょっと異なる印象を抱いたのである。「幼稚さ」や「お粗末さ」はそうであるとしても、それはこちら側からみた度合いがあまりにも強く、オウム側からすれば謝罪すること自体が重大事であった筈だ。つまり、オウムの「幼稚さ」や「お粗末さ」は、「セレモニーとして割り切って受け入れ」ようとしている河野さんの作法に上手に合やすことのできないところに露呈されているのではなく、そもそも謝罪しに行くという彼らの教義にとって不可能な行為に足を踏み出そうとしていたところに浮かび上がってくる。河野さんが、自分としては謝罪を望んではいないが、謝罪しにきたのであればきちんと謝罪して下さいと彼らにいったのは、オウムの謝罪の仕方を社会的な作法において値踏みしたわけでもなんでもなく、彼らに謝罪できるわけがないことを見抜いていたからだ。

オウムにとって謝罪することは、信者として最大の踏み絵にほかならなかった。もし謝罪がもう二度とサリンを撒いたり、殺人事件を起こすような反社会的行為を繰り返しませんというような意を少しでも含むものであったなら、彼らは教義を否定せざるをえなくなるからだ。オウムにとって教義と謝罪は両立しがたい行為であった。教義は謝罪を拒否するし、謝罪は教義を否定することになる。ところが、オウム幹部はたぶん教義と両立するような謝罪文を作成したのだ。それは河野さん以外の誰もが目を通していないと思われるが、一読した河野さんは、「謝罪文がまるで謝罪になっていない」として当然突き返した。もちろん、オウム幹部たちが「子供のようにおたおた」したのは、突き返された理由がわからないために「謝罪文をどう書き直せばいいのかわから」なかったからではないと思われる。もう二度とサリンなど撒かないと言明できない信者のままで、謝罪することがありえないということ思い知らされたからにちがいない。

謝罪しに行くという案が起こってくる経緯は不明だけれども、オウム流の謝罪の仕方が社会に通用しないことを信者たちは気づかされた筈だ。要するに、オウムがオウムのままの状態で社会に受け入れられると考えるほうがどうかしていた。彼らの「幼稚さ」や「お粗末さ」がそこに浮き彫りにされているとして、しかし、それらの精神性は社会の外へ突き抜けていく彼らのありかたの中で、社会の人々への対し方がもはや非常に遠くなっていることを物語っていた筈だ。彼らもかつては社会の中の住人であったのだから

ら、たとえばいまは社会の外へ突き抜けたとしても、社会的な記憶は残っているにちがいないと思いがちだが、たぶんそうではない。彼らに残っている社会的な記憶は社会の中の息苦しさであって、その記憶からも抜けだしてくる過程で彼らは別人として再生されつつあったと考えられる。オウムの中で生きるということは、いかに社会の中で生きてきた痕跡を消滅させるかということではなかったか。

作家の村上春樹が映画『A2』に言及した寄稿文（02.4.2神戸新聞）の中で、60人を超える地下鉄サリン事件の被害者と何人かのオウム信者（および元信者）にインタビューをして、《事件そのものとかかわりよりは、むしろ彼らがどのような人々であるのか（…）どこで生まれ、これまで何をして生きてきて、どのような経緯と理由でそこにいたのか》を知りたかったと書き、両者を次のように比較している。

《両者のどちらのヒストリーが僕の心にしみたかということ、圧倒的に「普通の人々」によって語られたものの方だった。なぜならそのような人々の語るヒストリーには、現実にしかりと根ざしたものでなくては獲得し得ない深みがあったし、奥行きがあったし、それは小説家としての僕の意識に確実にコミットしてくる種類のものであったからだ。

それに比べると信者（元信者）の語る個人的ヒストリーの多くは、たしかに通常ではない経験を含んではいたが、立ち上がり方が平板で奥行きに乏しく、そのぶん心に訴えかけてくるものが希薄だった。》

「信者（元信者）の語る個人的ヒストリーの多く」が、被害者である「普通の人々」と比べて「希薄」に感じられるのはどうしてか。村上春樹の説明によれば、こうだ。

《一般的に言うなら、閉鎖されたサーキットにあっては、「意識の言語化」は「意識の記号化」に結びついていく傾向がある。彼らはもちろん意識の言語化に対してきわめて熱心である。しかし彼らが言語と考えているのは、言語というかたちをとった記号にすぎないことが多い。狭い緊密なサーキットの中では、情報の記号化が簡単だし、その方がずっと伝達効率がいいからだ。記号化された情報を仲間と同時的に共有することで、連帯感も強まる。

しかしそのような記号化は長期的にみれば、確実に個人のナラティブ=ヒストリーのポテンシャルを落とし、その自立性を損なっていく。それが小説家としての僕が彼らとの対話をとおして、かなり切実に感じたことだった。

言い換えれば、それはとても危険なことなのだ。》

「ナラティブ」とは物語のことだが、閉鎖的なコミュニティーの中では、同質性、均質性が強調されるが故に、各メンバーの自己史や物語が衰弱していくことになるのは当然だし、そもそも閉鎖空間においては自己史や物語が不要であるだけでなく、邪魔な要因なのである。オウム信者の個人的ヒストリーが「平板で奥行きに乏しく、そのぶん心に訴えかけてくるものが希薄」な理由は、説得力をもって語られているけれども、それはオウムに限らず、あらゆる閉鎖的なコミュニティーに当てはまることだ。しかし、オウ

ムは閉鎖的なコミュニティであることは間違いないが、社会の外へ突き抜けていった者たちの宗教集団であるという特質を無視するわけにはいかない。その特質をも踏まえて考えるなら、信者たちにとっての社会の中で貯えられてきたさまざまな記憶は彼らの宗教生活にとって、たぶん全てといってもいいほど無意味なものでしかなかった。オウム信者として新しく生き直そうとしている者たちにとって、それ以前のさまざまな個人的ことがらが重要である筈がなかったし、むしろ現世に囚われないようにするために、現世での個人的ヒストリーからできるだけ早く脱却することを彼らが願っていたとしたら、当初から村上春樹のインタビューの意図はズレていたのかもしれない。

このようなズレは村上春樹のみならず、ほとんどの論者の手つきの中に見出すことができる。《「オウム事件」の、坂本弁護士一家殺害と死体遺棄のいきさつを、検察官調書を引用しながら、極めて詳細に掘り起こしている》と評する劇作家の別役実が、佐木隆三著『三つの墓標』の書評（02.5.19付産経新聞）の中で、こう書いている。

《一読して、その計画のズサンさに、我々は驚かされることになる。手袋を忘れ、指紋を手がかりにさせまいとして参加者の手を鉄板に押しつけて焼こうとしたり、犯行に使われた車両を処分しようとして、ほぼ本州を縦断しながら果たせなかったり、何よりもその犯行日が「文化の日」で、坂本弁護士が通勤しないのを知らなかった、という点に至っては、何をか言わんやというところであろう。

しかしその点が、この事件のありようを象徴的に示すものとも言える。つまり、世の中を世の中たらしめているものに対して極めて鈍感な集団が、その教祖のひとりよがりな被害妄想にそそのかされ、ほとんど「ドタバタ喜劇」のように、暴走してしまったのである。もちろん、だからと言って我々は、これを「笑う」ことは出来ない。》

オウムの犯行とはそのように浮き世離れしたものだろうとよく納得されるし、社会の裏表を知り尽くしたようなプロに近い手口であることのほうが、むしろオウムにふさわしくない。社会の中からみれば、別役実のみならず、誰もが「その計画のズサンさ」には恐れ入るし、なんと「ドタバタ喜劇」のような「極めて鈍感な集団」よ、と呆れ果ててしまうが、社会に対するオウムのその素人以下の「お粗末さ」こそが、図らずもオウムが社会の外へ突き抜けてしまっていることの特質を照らしだしているにちがいない。彼らは社会に対して無知として生きることを信仰として選びとっているのだから、その無知を指して「計画のズサンさ」だの、「鈍感」だのといってみたところで、詮方あるまい。だいいち、彼らは自分たちが凶悪な犯行に手を染めているなどとは思っていなかったにちがいない。サリンを撒くことも、坂本弁護士一家殺害も、たぶん修行の一環にほかならなかったのだ。

修行がどうして犯行でありえよう、というのがオウムの言い分だと思われる。それほど彼らは社会から遠ざかってしまっているのだ。排除運動が高まっているから、彼らは押し黙っているだけで、もしかかなり強引に彼らの口を開けさせることができれば、皆一

様に、修行のためならサリンだって、何だって撒くと言明するだろう。オウムとはそのような信者たちの集団なのである。「世の中を世の中たらしめているものに対して極めて鈍感な集団」であるが故に、「教祖のひとりよがりな被害妄想にそそのかされ、ほとんど『ドタバタ喜劇』のように、暴走してしまった」のではなく、社会に対して「きわめて鈍感な集団」であることが、「教祖のひとりよがりな妄想」と一体化して「ドタバタ喜劇」のような様相のうちに、社会からみれば犯行以外のなにものでもない修行をなにごともなくやってのけてしまうということを、白日の下に晒したのだ。

考えてみるまでもなくオウムの信者たちが、社会の中で上手に折り合いをつけながら生きていくことができる器用な者たちであったなら、オウムと接点を持つことがなかったし、オウムの中で社会の外へ突き抜けていくようなこともなかっただろう。社会の都市的作法に不器用な者たちがオウムに加入することによって、ますますその不器用さが加速され、社会に対してより一層「鈍感」になっていくことが求められたにちがいない。彼らのそのような基本的な性向はサリン事件以後、教団が解体寸前にまで追い込まれ、多くの迫害を被る中でいくらかかなりとも変わっただろう。もちろん、変わりはない。信者たちにはこれまでのオウムを変えようとする意志もないし、また変わることをも望んでいないと推測される。地域住民の排除運動の中で個々の住民たちとかなり打ち解けた雰囲気醸成し、善意剥きだしのおじさんやおばさんたちが、オウムを抜けて自分たちの許へ戻ってくるのをいくら願っても、彼らはただ笑うだけでオウムから引き戻す気は毛頭ない。

《しかしよほどのことがない限り、教団の閉鎖性がこれから先、変わることはないだろう。なぜなら彼らの求めているのは、現世から離れたところに修行空間をつくりあげ、現実社会とは異なった価値観のもとに自己の内面を追求することであるからだ。麻原がいてもいなくても、ほとんど関係はない。そこには既に確固とした修行運営システムができあがっているからだ。まわりの現世の人々は彼らを迫害するかもしれない。しかしその迫害は逆に彼らの結束を強くするだけだろう。

彼らはもちろん社会における自分たちのポジションを現実的に必要としている。修行するための場所、生活の資を得るための経済活動の基盤。そういうものがなくては活動を続けていくことはむずかしいからだ。しかし彼らは外なる現実との実りある「共生」を求めているのか？ それはきわめて疑わしい。なぜなら彼らはそもそも、システムの成り立ち方からして、そんな共生をとくに必要とはしていないからだ。

それでは基本的に共生を必要とする人々と、基本的に共生を必要としない人々とが、同じ社会内で共生をしていくことは果たして可能なのか？》

村上春樹のこの捉え方は非常に簡潔で的確である。映画『A2』が「このような本質的な疑問」を我々に突きつけているとみるのも、けっして間違っていない。では彼は、この問いにどう答えるのか。社会が《どれほど劣悪であれ、我々は 我々の圧倒的多数

は その中でなんとか生きのびていかななくてはならない。重要な事実はむしろそこにある。》という。その「重要な真実」の前に立ち止まって考えてみたい。「なんとか生きのびていかななくてはならない」のは、社会の中に居住する我々だけではない。オウムの彼らもそうである。彼らがサリンを撒き、坂本弁護士一家を殺害したのも、すべてオウムと共に「なんとか生きのびていこうとしたからだ。我々は別に「生きのびていかななくてはならない」明確な理由を持つわけではないが、彼らの場合は、修行空間を確保するためにも、「なんとか生きのびていかななくてはならない」のだ。

全く逆方向であれ、次元的に異なるにしろ、「なんとか生きのびていかななくてはならない」という双方の思惑が接した光景が、監視する側の地域住民と信者たちの和気あいあいとした交流のかたちをとっていたことはいうまでもない。もちろん、そのような交流は住民側の「脱会したら遊びに来いよう」という別れを惜しむ声や、また信者側のオウムから一歩も出て行こうとしない打ち解けかたに象徴されるように、双方の間にオウムが大きく横たわっているかぎり、本当の「共生」などありえないことを逆に物語っている。そのことを踏まえ、《もちろん犯罪は犯罪として裁かれるべきだし、教団は自らの行為の責任を引き受けなくてはならない。》とした上で、村上春樹は彼らの犯罪行為から受けた痛みを、我々は《自分の痛みとして引き受け、感じ続けていかななくてはならないだろう。／彼らを痛みとして許容すること それがつまりは彼らと「共生する」ということの意味ではないか》という。

彼はオウム排除運動に結集する住民に対して、ここを追い出されたら次へと移動するしかないオウムの排除をいくら繰り返しても仕方がないから、「彼らを痛みとして許容」する以外にないのではないかと提案するのだ。この提案は態度を硬化させている住民に聞き入れられるだろうか。とんでもないと撥ね付けられそうな気がする。住民が即時退去せよと叫ぶのは、かつてサリンを撒いた一味だからだけでなく、今後も自分たちの居住地域でサリン等を撒くかもしれない不安と恐怖にとらえられているからだ。だから監視小屋まで作って見張っているのである。村上春樹は住民にむかってオウムを、「痛みとして許容」せよ、という前に、まず不安と恐怖から住民を解放してやらなければ、とても聞く耳を持たないだろう。

かつてサリンを撒き、いくつかの犯行を重ねてきたオウムは、今後も同じことを繰り返す危険性があるだろうか。事件前と事件後のオウムは基本的には変わっていないから、教義としての危険性はある。周囲の人々はその点に注意を凝らしてオウムを危険視するけれども、そしてそれは当然だとしても、重要なことは事件以降、オウムはもはやサリンを撒く組織としての力量を持ちえなくなっている点ではないか。教祖を含む多くの人材の逮捕や離脱、逃亡等等、また地域住民の退去運動などの世論の注視によって、オウムはサリンを撒くどころではなく、自分たちの身の置き所すらおぼつかなくなっている。映画『A2』からもわかるように、いまのオウムの願望は修行空間の確保であって、

その場所に信者たちが身を寄せ合って日々生きていくことであろうと思われる。要するにオウムにとっても、またもや事件を惹き起こして教団としての最後の息の根を止められてしまうことが、最大の痛恨事なのだ。

もはやオウムを危険視する必要はないし、彼らもまた自分たちの命取りになるような犯罪を軽々と行えなくなっているということ、地域住民に声を大にして発した上で、村上春樹がいうように、オウムが我々の近くに来ることがあれば、「彼らを痛みとして許容」していこうではないか、と呼びかけることも可能である。だが、どうやって「痛み」を許容するのか。その具体的なありようが『A2』の中で、一部の地域住民との交流として映しだされている。「痛み」など意識しないかたちで。社会学者の宮台真司は『ダ・ヴィンチ』の連載(02・1)で、次のように書いている。

《映画には二つのことが描かれている。一つは、私自身が繰り返し書いてきたこと。つまりアレフは空洞化した地域の「村興し」に役立っているという事実だ。アレフの「アジト」に隣接する「監督小屋」に集った住民たちは、久しく失ってきた交流を復活し、仲良くなる。

もう一つは、転入受け入れ反対運動の現場を知る者には自明だが、そうでない人々には全く知られていないこと。すなわち、反対住民らとアレフ信者らは、濃密な時間と空間を共有するうちに、互いに融和してしまうことが珍しくないという圧倒的な事実である。

《アレフを脱会したら、養子に來いや》。アレフに危険がないことが住民に理解されたのか。違う。森監督は周到にも、サリン事件から現在に至るまでの経緯を麻原彰晃が「あえて」もたらしっていると信じてはいないかと幹部信者らに尋ね、イエスと言わせるのだ。

だとすれば危険は少しも減っていない。しかし(...)宗教は社会よりも大きい。そうでなければ機能を果たさない。宗教はもともと危険なのだ。アレフに始まった話ではない。とすれば、社会と宗教の両立にとって、可能なことは一つしかない。それはいったい何か。

決して分かり合えない者たちの事実に融和だ。現存する宗教の多くが淘汰の末に社会と両立しているのがまさにその結果だ。反論があろう。『A2』が描いた事実は、分かり得ない者たちの融和というより、日本人の共同体的作法に基づく無原則なもたれ合いだと。

その通りだ。でもそれでいい。世に批判される(私も批判してきた)日本人の共同体的作法も、分かり得ない者たちの事実に融和という面でアドバンテージがある(笑)》

社会のなかで蠢<sup>うごめ</sup>いている我々と社会の外へ突き抜けていったオウムとの「分かり合えなさ」は、いうまでもなく社会の中で蠢く我々を無数に貫いている、みえてこない「分かり合えなさ」のみえる姿をとった究極の関係として把握される。つまり、オウムとの「分かり合えなさ」はみえているだけに対処しやすいけれども、社会の中で同様に暮ら

す隣人との「分かり合えている」筈で覆われているみえてこない「分かり合えなさ」もまた、不安であり危険である。「決して分かり合えない」オウムが過疎の村にやってきたとき、住民同士が「久しく失ってきた交流を復活し、仲良くなる」のは、オウムとの「決して分かり合えない」中での交流によって「分かり合えている」筈の底に沈殿している住民同士のみえてこなかった「分かり合えなさ」が<sup>あが</sup>炙り出されて、相互に踏み入る関係を改めて築くようになったことを意味している。

「日本人の共同体的作法に基づく無原則なもたれ合い」であろうとなんでであろうと、「決して分かり合えない者たちの事実的な融和」こそが「決して分かり合えない」溝の深さを埋めていく、と宮台真司がいうとき、相互に踏み入る関係を築くことこそがやがて相互の「分かり合えなさ」を上回るといことだ。社会の外へ突き抜けていったようにみえる信者たちであっても、教義が無視できなくなるほどに彼らの身が現世につながれているという厳然たる事実が膨らんでくるなら、「共生」は可能になってくるのである。

ライター藤井誠二は、オウムの広報部長荒木浩が『A2』の監督森田達也にむかって、「98年終わりから99年にかけて、地域で（排斥）運動が起こったときに、なんで森さん来てくれないんだ？と正直思っていました。こちらから言うことじゃないですけど……」といい、「森さんとの日常の言葉のやりとりのなかで、事件がなぜ起きたのかということに向き合うしかなくなっていったんです。割り切れる問題じゃないので楽しいことではありませんでしたが、考え続けなければならない問題なので……教団の中では事件の話をしてないので、森さんを通してサマナたちも事件について考えるようになったと思うのです」と語るのを前述の『アエラ』の中に書き留めているが、それはもはやオウムが信者たちの関係のみで維持できなくなっていることを示すと同時に、森監督がそれほどまでに、オウムの中に踏み入っていることを示している。「決して分かり合えない者たちの事実的な融和」がそこにも垣間見られる。

オウムが紛れもなく戦後日本の社会の真っ只中から生みだされたのとは様相を異にして、「9・11」同時中枢テロはアメリカ社会の外から仕掛けられたようにみえたとしても、アメリカ社会が国内を越えてイスラムの地域にまで拡がっていく中でテロは不可避免的に生じたということは明白であろう。映画『A2』はそのこともくっきりと浮かび上がらせている。

2002年5月25日記